職業は迷宮使い

原翔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
職業は迷宮使い

【Ｎコード】
Ｎ６６２１Ｐ

【作者名】
原翔

【あらすじ】
手違いで異世界に召喚された男――黒澤幸助に与えられた異能はダンジョン！？突然の出来事に困惑する幸助。背中に漂う哀愁。ダンジョン使って何をしろと……
時にはダンジョンを運営して設備を充実させたり、時にはダンジョンを戦闘に利用する事で有利に進める。またある時には、管理室を近代化してヒキニートになる。あの手この手でダンジョンの活用方法を苦心して探っていく……そんな男の物語。

プロローグ

「おいっ！　ガキ共チンタラしてんじゃねえ！」

髭面の濃いおっさんの声を聞きながら俺、黒澤幸助（くろさわ こうすけ）は心臓にケンカを売ってるがごとく急な上り坂をよろよろと駆け上がる。

「なんだ、もうへばったのか？　だらしねえ奴だなぁ。根性を見せてみろ！」

根性？何それ、おいしいの？俺のライフポイントはすでにぜろだぜ！ヒャッハー！…ははは……。

すでに視界は霞んでおり、体力は限界に近い事を自分では悟っている。

「おいおい。なんだこのざまは！　昼飯食ったばかりだろ！　走る元気がないとは言わせねぇぞ！」

いえいえ昼食は3時間前ですぜボス…ボケるにはハヤスギダロ、このサディストめ……。

てか、胃は吐きすぎてとっくに空ですがな。口から出るのは胃液だけだぜ♪

「ペースを上げろこの豚共！！　屠殺されてえのか！」

怒鳴り声を鬱陶しく感じつつも、なけなしの体力を振り絞りペースを上げた。屠殺されては敵わないしな。

キーンと耳鳴りが聞こえて来たが無視して走り続ける。

（どうしてこうなった……）

陰鬱な気分の中、未だかつて無いほど激しい己の心臓の音を聞きながら、自分の不条理な境遇を思い出していた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

高校へ登校するために自宅の玄関の扉を開けたら、また部屋だった。

「は？」

それが異世界に召喚された俺の第一声だった。

だらしなく口をあけている自分の様子を客観的に見ると極めて間の抜けた姿だっただろう。

それも仕方が無いことだと思う。

どこのドリフだよと……

中世ヨーロッパを模ったと思われる部屋の中には、金髪やら銀髪やら目の色が黒じゃないわと明らかに日本人じゃない奴等が陣取っていた。明らかにガイジンサンと一発でワカリマシタヨ。

その中でも一段と偉そうなロリロリな幼女がぶちかましたのが、

「いやー、すまんな。手違いでお主をこの世界に召喚してもうた」

とは召喚した幼女の弁。

「起動確認だけのつもりが、つい魔力を込めすぎてのう…ふー、びっくりした」

幼女の言葉を要約すると次のようになる。
この魔王の「ま」の字も見当たらない世の中。
だからといって、非常時の備えを怠たっては王国の一大事。
魔王に対抗するための異世界の勇者を召喚する魔方陣の点検を行っていたときに、つい魔力を込めすぎて間違えて魔法陣を発動させてしまったらしい。
すばらしいほど魅力的なドジッ子ですね……。

「ついかっとなって召喚した。今は反省している」

呆然としている俺に対してフレンドリーに笑って毒を吐き続けるロリロリ様。
お立ち台で周りの大人に身長で負けないようにしている所が特に微笑ましいのう。
……などと、ほのぼのですませられるほど自分は人間ができていない。

（おい、手違いは無いだろ！）

だが、幼女は愛でるものと紳士の約束事で決まっている。
（そう！俺は紳士（ジェントルメン）！　落ち着くんだ……つまりは、元の世界に戻れれば良いだけではないか。幼女（愛でる対象）に対して大人気なくキレてはいけない……）
こめかみに青筋を浮べるも、なんとか微笑しつつ俺は尋ねる。
「ここが異世界で、俺が手違いで召喚されたのはなんとか理解したよ」

「おお。理解が早いのう。わらわの言葉を理解するだけの知能はあるようじゃな」
「……オチツケ、オレ……とりあえずは元の世界に返してくれないかな？」
「無理」

打てば響くタイミングで応える幼女。

「……」

呆然とする俺。

「一年間ぐらい経たないと魔法陣を使用できないのじゃ。すまんのう。わはははははははははは」

止めの一撃を加える鬼畜幼女。コレは愛でる対象じゃないと認定。

「わはははははははははははは……じゃねぇえええええだろうが！！」

ついにキレた俺。ジャン＝クロード・ヴァ〇・ダムも真っ青の暴れっぷりを披露する。
……妄想の中だけだがな。
実際は、帰宅部の俺では部屋にいた筋肉ムキムキな漢達に無抵抗で押さえつけられるのが積の山だった……

「まぁ怒るでない。異文化に触れることは人間性を成長させるものじゃ。しばらくは城に滞在してみてはどうじゃ？こちらでの生活は保障するでの」
「うす」

さすがの幼女”様”も悪いと思われたのか、此処の世界にいる間は衣食住を提供してくれると愚かな”私”に慈悲を与えてくださった。もちろん、仕事も”私”に見合った物を見つけてくださると仰られたので身に余る光栄をお受けいたしました。

首元に突きつけられた冷たい剣先は回答に影響ないですよ？

ええ、断じて。

後日、城に招かれて、適正に合った職業を判定するために色々とテストされた。

ところで、異世界→召喚→チートって男のロマンですね。俺も憧れます。

色々と開き直った俺は異世界をじっくり堪能する事にした。

素晴らしきかなスローライフ！

せっかくのファンタジーな世界なわけだから、魔法とかバンバン打ちたいなーと大人気なくもワクワクしていた。

ところがどっこい、現実はうまく行かない。そして判明したのが俺一般人！

当たり前だろって？

ここ魔法あり剣ありである、似非指輪物語な世界において、俺のスペックが正真正銘の一般ピープルであることが判明したのだ！

俺にあるのはチートどころかハンデだけだと。

お約束の身体能力倍増？

帰宅部なめんなよ。長距離走で二ｋｍ走っただけで倒れたがな。

寧ろ、人間が台所の黒い悪魔の如き勢いでカサカサと高速移動する

ほうがキモイと思う。
無限の魔力？
そんなもの雀の涙しかないわ。この世界において個人の保有できる魔力量は、才能があるやつが幼い頃からコツコツと上げていくらしい。もちろん生まれつきの魔力量の個人差はあり、途方も無い魔力を持って生まれる奴もいる。
しかし！魔法を発現させるには俺の魔力スッカラカン。つまり、御年１７歳の俺では魔術を学ぶのには手遅れだとよ。
てか、手からビーム撃つのは人間じゃないと自分思います。
マホウツカイの夢が断たれたわけだが気にしない。
……悔しく無いもんね。

あぁ、俺のテンプレ異世界召喚の特殊能力どこ逝った……。
現実はうまくいかないものだ……。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

紆余曲折あって、召喚されてから一ヶ月たった。
一カ月も経てばさすがに当初は戸惑うばかりだった異世界の習慣にも嫌でも慣れた。
鬼畜幼女改め第三王女さま直轄の従者として、現在奮闘中。つまりはパシリ。正直あの幼女が王族だとは知った時はさすがにびっくりした。通りで胡散臭い俺を独断で城の中で面倒見れるわけだ……。
体力の測定試験で散々な結果を心配されてか、体力を付ける目的で近衛騎士の強化合宿に強制的に参加させられている。
「従者は体力が資本じゃ」と言うロリ王女様のありがたいお言葉のもと、ビリー隊長も裸足で逃げ出しそうな激しい訓練を受けております。

ナニが起こるか分からない異世界。
命の危機に見舞われる事があるかもしれない。
そのような事もあり、何だかんだで真面目に訓練を行っていたと思う。
いざという時のために備えて、この世界の一般人を大幅に下回るような俺の脆弱な体を鍛える事は無駄ではないしな。
だからと言って限度がある。

ココ大事だからもう一度主張したい。

具体的にはクマさんに追いかけられてフルマラソンしたり、クマさんと組み手やらクマさんから逃げるためにノーロープ・バンジーやらクマさんと……。

何度も死線をさ迷いましたとも……ええ……
回想する事で疲労を誤魔化していたが現実逃避もそろそろ限界だ。

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！」

背後を振り返ればクマさんが雄叫びを上げてハッスルしている。
清々しいほどヤル気満々ですね。
俺は一言物申したい。

（もう……帰らせて……）

限界ですがな。主に俺の命が……。
いつになったら終わるんだ。

「よし！　頂上が見えた！　あと少しだぞ…て、おい。倒てるのか

よ！　しっかりしろ！！」

目の前に広がる花々。

ふむ……気づかない間にお花畑に移動したらしい。

（今日もいい天気だねー……）

などと場違いな事をに思いつつ、俺は意識が遠ざかっていく。

おや？あそこに見えるのは天国のじいちゃんだ…やっほー。

じいちゃんに「マダココニクルノハハヤスギダッペ」と説得され意識を取り戻したところで、今日の訓練は終了となった。

同僚に酒場に誘われたが、それを丁重に断りつつ俺は此処にいる。

「ふぅ～……」

温泉。

異世界に温泉。

異世界がなんぼのもんじゃい、こちとら日本の伝統文化の集大成でい。

訓練でシゴかれ体に溜まった疲労が抜けていく。

「あヴぁヴヴぁヴぁヴぁヴぁヴぁあああああヴぁ」

「いい感じで壊れてますね。マスター……」

呆れた様な声が発せられた方向に目を向ける。

まず目に付いたのが、紺色の服――所謂メイド服。燦然と輝く雪

のような純白のエプロンに同色のヘッドドレスが眩しい。
メイドさん。勿論、男の夢が詰まっているガーター常備。
完璧のようで残念なのが胸の付近が断崖絶壁で、

「何か？」
「いえいえ」

どんよりと此方を見つめる双眸は銀色で、プラチナブロンドの髪は腰まで伸ばしている。その姿は美しいと言うより可愛いらしさが際立っており、幼さと大人の美が混在している。

「そのダレた姿は問答無用でタヌキさんです。もう少しシャキッとして下さい」
「あーあー聞ーこーえーなーい」
「はぁ」

ため息されても気にしない。のんびりと温泉の中で体を伸してくつろぐ。

「ここは俺のダンジョン（腹の中）じゃ！　聞ーきーたーくーなーい！　まったりするのだ！」

などと身も蓋も無い事を叫ぶ。
ここは地上より遥か地下にある迷宮の管理室。
城の検査では発見されなかった俺に唯一与えられた異能（ダンジョン）。

プロローグ（後書き）

はじめまして。原翔と申します。
初投稿です。
初めてＳＳを描くに当たり勢いを重視したらコノザマです。
もう少し勉強して日本語を上手に使えるようになりたいと思います。
反省。

第1話　ダンジョンを運営しよう！（前書き）

感想を頂くとテンションがあがりますね。
一週間後に投稿する予定でしたが、おかげさまで二日で書けました。
某赤い彗星もびっくりする通常の三倍以上の速度で更新できるとは……。

第1話　ダンジョンを運営しよう！

ルーンダイト王国。
歴史は古く、建国当初から列強の国として周辺国に知られている。
領内には肥沃な土地が広がっており農業が盛んだ。
鉄や鉛など様々な鉱物が数多く産出される。
豊富な物資を背景に周辺国に比べ産業が発展しており、働き口を求め多くの人々が訪れる。
ルーンダイト王国で、特に有名なのがワイバーンやグリフォン等の飛行する魔物と魔法を組み合わせた空戦部隊だ。
当時、他国に先駆けて導入されたそれらは周辺国にすさまじい衝撃を与えた。
空を埋め尽くす魔物の群れ。
遥か上空から放たれる超広範囲攻勢魔法。
詠唱を止めようにも縦横無尽に飛翔されては打つ手無し。
逆に返り討ちに合う者が多数いた。
それでも戦場にとどまり続ける兵士は次々とその命を失う事となった。
月日は流れ、今では対抗手段が存在しているとはいえ、未だに他の国と一線を画す質を誇るルーンダイト王国の空戦部隊は恐怖の代名詞として君臨している。

そんなルーンダイト王国において、新たなダンジョンが発見された。
現在、冒険者達の間でもその話題で持ちきりになっている。

そんな話題のダンジョンの遥か地下。
巷で話題のダンジョンの主はと言うと……

「うぅぅううう……きぼぢわりぃ……」

見苦しく床をのたうちまわっていた。

＊＊＊

「まったく……温泉であんなに暴れるからのぼせるのです。気をつけてください」

温泉に入ると泳ぎたくなりませんか？
自業自得ですね、はい。
何故か温泉が完備されているのが俺のダンジョンクオリティ。
管理フロアを地下方向に拡張した際に、突然温泉が沸いたときはチビリました。
てか、茹でられました。死ぬカト思ったよ……。

「ぼあああぁ……耳元で叫ばんといて……ナビ子さん……」

のぼせた頭を膝枕で介抱してくれている甲斐甲斐しいメイドさん――ナビ子さんは嘆息した。
微妙に役得なのは内緒だ。
俺の様子に呆れつつも片手の団扇を止める事は無く扇いでくれている。
迷惑かけますのう。ほんまナビ子さんはメイドの鏡やで。
ちなみに、ナビ子さんはダンジョンの管理を司る精霊みたいな存在らしいです。
彼女をナビ子さんと命名したのは俺。
あまりに安直すぎて凄い勢いで罵られました。

あまりの激しい叱責に癖になりそうだったのは内緒だ。
そんな彼女はダンジョンというより俺に取り憑いているらしく、俺の知識を共有しています。当たり前だが、プライバシーにあたる情報は意図的に排除している。

元の世界のネタも通じる小粋なメイドさんです。

「嗚呼……タダでさえ取り返しの付かないくらいタレ目のマスターが、ついに全身までダレてしまいました。これでは何処からどう見てもアルティメットなタヌキさんです」
「だぬき言うな」

タヌキとは失礼な。最近これでも体引き締まってますよ？　肉ありませんよ。
身長は低いがな……。
「はいはい」と俺の抗議を無視してナビ子さんは嘆息し、俺の額にひんやりとした物体――”スライム”を乗せた。
はいそこ、奇妙な目で見ない！スライムを舐めるなよ。スライムは体温調節機能があるから冷〇ピタ並に気持ち良いんだぞ。

「冷たぁあああくて気持ちぃいいいぃぃぃぃぃ！！　……嗚呼、極楽……スラ吉さん、迷惑をかけるのう」

「遠慮すんねぇ」って感じでスラ吉さんがブルンブルンと震える。
さすがスラ吉さん。粋な江戸っ子だぜ！
当たり前だが”スラ吉”さんは仮称だがな！
此処のダンジョンに居る知り合いの魔物は大抵仮称で呼んでいます。
てか、モンスターの言語は理解できないっす。
誰かモンスター語を学ぶ方法知りませんかね？　無理ですか、そ

うですか。
そこで諦めず、ヤックデ〇ルチャな精神で相互理解に努めました。
具体的には、ヘイヘイホーな”与〇”とボディランゲージを駆使してスラ吉さんとは親友（ソウルフレンド）になっています。その際、ナビ子さんには「何？　この奇人変人」って感じで見つめられたが気にしない。

「ホント、マスターは無駄に元気が有り余っていますね……もう、介抱必要ないんじゃないですか？」

それは勘弁してください。
メイドさんの膝枕の価値は１００万ドルの夜景を超えると思います。「しかたないですねぇ」とナビ子さんが微笑み、子供をあやすように頭を撫でてくれた。
それに対してさらに溶ける俺。
溶ける俺に呼応し、周りにいたスライム達が寄って来て俺の体温を冷やしてくれた。
ちなみに、俺の腹（ダンジョン）の中で生息する魔物は友好的で命令をキッチリ遂行してくれる。どうも俺をダンジョンの主として認識しているらしい。
スライムさん達とは妙に馬が合ったのか特に親密な関係を築けている。
てか、ダンジョンの外を普通に出歩いていても支配圏外のスライムが薬草をくれたり、珍しい鉱石をくれたりした時はビビッタネ。

（おぉう……スライムヘブン……）
「恐ろしいくらいスライムに好かれますね」
「妬いてる？」

戯言を放つ俺に対して、涼しい顔してメイドさんコークスクリューを放つナビ子さん。追撃でメイドさんアパカーにメイドさんクロ

ーと容赦なく殺人コンボをつなぐ、阿修羅ナビ子さん。
てか、そろそろやめて……穴が五つ増えるぅぅぅぅう！

「寝言は寝てから言ってください。ちなみに今のマスターの姿を現すならスライムに捕食されているタヌキさんです」
「あい……」

捕食タヌキは訂正して。正解は磔タヌキさんどす。

ナビ子さんの介抱の甲斐あってか、のぼせた頭が冷えたことで体調が全快した。
クールな俺参上。はい、どうでも良いですね。
そして現在居るのは監視室。
迷宮の侵入者の現在地点を示したり、罠の状態を確認したり、現場の映像を映す事などができる。
立体映像です。科学もビックリ。
あまりの鮮明さに、コアブロックシステムが発動したグロ死体を見た時は吐いたガナ。

この監視室をはじめとした、ダンジョンの設備は全て魔力で運用している。
設備の運用には侵入者や此処に生息している魔物の魔力をごく少量奪うことで賄うことが可能だ。
特にダンジョンの入り口や階段付近での魔力の吸収効率は高い。
そんなわけで、できるだけ侵入者には長時間ダンジョンを探索して貰うと魔力的な意味で美味しい。

此処のダンジョンの特徴として、高濃度の魔力塊が低い階層でも生成される。

すごく高い値段で売れるらしい。
低い階層の魔力塊はピンポイントで魔物さん達に積極的に回収してもらっています。
ダンジョンの機能を拡張する際に役立つからな。
回収したそれらは低階層において、侵入者を釣るためにごく少量設置している。

つーわけで、魔力塊に釣られたお客様達に対して、資本主義の基本であるお客様第一主義に徹してサービスを提供する事でダンジョンを運営しています。
具体的にはダンジョン内は魔法的な何かで冷暖房完備、快適な室温湿度を保てるようにしている。
コレを軽視すると蒸し暑くて死にそうになる。
ついでに新鮮な空気も送り込んでいるし、湧き水も設置。
水と空気はライフラインです。無いと普通に死にます。
お客様（侵入者）を根絶やしにすると管理フロアがサウナーになって、俺も死ぬる。
死にそうなお客様は最寄の町の教会に転送しています。てか、ダンジョンの住人以外は教会しか転送できねぇです。なぜ？　転送費用として有り金半分と、持ち物を一部徴収しています。お約束だよね～。

低い階層では明かりが点いているから初心者でも安全に冒険できるよ！
気軽に遊びにおいで♪

ちなみに現在、ナビ子さんには監視システムを操作してもらって、かねてからの案件の情報を集めてもらっています。不意に顔が歪むナビ子さん。

「う～ん……地下三階に居ますね……盗賊が袋小路にねぐらを築いて、我が物顔で住み着いています……十九人程度……群れていて邪魔ですね」

軽く毒を吐くナビ子さん。まあ、その気持ち理解できるけど……。

冷暖房完備だからって、まさか住み着くのは想定外だった。

ダンジョンの運用って奥が深いねぇ～。

「マジデか～……害虫はさっさと駆除しないとなぁ。百害あって一利無しだし」

我が迷宮は安心安全がモットーです。

上記のグロ死体を量産するような油虫共はいらんとです。

お客様（侵入者）減るし、一ヵ所に留まるから魔力的においしくないし。

（さっさとお帰り願いしますか……害虫は増えると駆除が大変だしな）

正々堂々自分が出向く事は論外。数秒でお肉にされる自信があります。

ダンジョンの外に相手を誘き出すとか話にならない。能力の制限を受けるし、ナビ子さん達の支援を受けられない状況でどないせいと？

闇討ちは悪手。相手の人数が多すぎて、やっぱりお肉になる可能性大。

（……てことは、射程範囲外からの大人数による大規模飽和攻撃で制圧しか手段無いかな？）

標的と物理的空間的に俺が別の場所に居ることができればパーフ

エクツ。
これ重要。命に対して臆病になるべし。この世界の脳筋共じゃあるまいし。

とりあえずの方針を決める。

「ナビ子さん、空いている大部屋あるかな？」
「そうですねー。少しお時間を下さい……はい、地下三十階の大部屋が空いています」
「そんじゃあ大部屋の入り口を埋めて確保しといて。それと……スライムさんとグールさんに連絡お願い」
「はぁ……スライムさんとグールさんに連絡となると……アレですか。またエグイ事をしますね、マスター。ヘタレタヌキさんからクロタヌキさんに変態しています」
「変態って……俺って何時の間に昆虫に退化したんだ……」
「気にしないでください。それでは準備が完了しだい、転移の罠をアジト全体に仕掛けておきます」
「なんか釈然としないが……了解。頼むよナビ子さん」

ナビ子さんは、此処の迷宮の内であれば任意に罠を設置できるトラップメイドさんなのだ！
ちなみに罠の管理自体もお願いしている。
罠仕掛けすぎても冒険者（カモ）が蹴散らされてはかなわんし。
何事もほどほどが一番だね！
罠だけでなく迷宮の管理や魔物さんとの折衝もお願いしている。
つまり万能スーパーメイドナビ子さん。

（あれ？……俺、何もしてなくね？）

うむ……気にしない。

スーパーメイドナビ子さんの活躍により、タヌキ型ヒキニートが誕生しつつあるのは秘密だよ！

「はい、解りました。迷宮の構造を変化させる程の大規模運用となると……『管理権限』が必要ですね」

「う～ん、しかたないか……『上級管理権限付与』対象『準管理者』」

宣言した直後、ナビ子さんの表情が消える。

「『管理権限』　管理者からの要請により、一時的に準管理者の管理権限を引き上げます」

ナビ子さんから表情が消えたことで無機質になり、機械的に言葉を垂れ流している。

（やっぱ慣れないなぁ～。ロボナビ子さんも良いと思うけど、何か違うなぁ……）

ナビ子さんは弄ってなんぼ、弄られてなんぼが魅力だと思う。

「『構築』　対象、地下三十階大部屋……処理完了まで残り十秒……出入り口封鎖完了。目標達成により準管理者の管理権限を元の水準まで引き下げます……はいお疲れ様です、マスター」

大部屋の入り口を埋めると同時に、ナビ子さんが微笑む。やっぱり、無表情より笑顔がいいよねぇ～。

女性は笑顔が一番です！
とりあえずナビ子さんに「ご苦労さん」と労う。

「私はこれからスライムさん達にお話を通しに行きますが、マスターはどうしますか？」
「勿論付いて行くさぁ～。スラ吉さんとはソウルフレンドだからね。俺様大活躍だぜ！ふはははははははは」

サムズアップ。
ナビ子さんげんなり。

「……何故かマスターの背後にタヌキさんが高笑いしている幻が見えます」

ふはははは。
俺は”聞か猿”！
何も聞こえないし、気にしない。

第1話　ダンジョンを運営しよう！（後書き）

『ダンジョンを運営しよう！』と名を借りた設定回でした。
設定だけではつまらないのでは？と思い、
メイドさんに対してタヌキを相手に膝枕させてみました。
試みは上手くいったでしょうか？

もげろタヌキ。

次はナビ子さんとの出会いと主人公の能力の詳細についてぼちぼち
書く予定です。

第2話　大自然な俺とナビ子さんとの出会い（前書き）

食事中の方、申し訳ありません（土下座）

第2話　大自然な俺とナビ子さんとの出会い

頭部に激しい衝撃。
体が不味い勢いで真横に飛ぶ。
これは真正面から何の策を弄さずに挑んだ結果だと納得していた。

多勢に無勢。
その行動はただの馬鹿を通り越して罪ですらある。

だが、後悔はない。
臆病に、だが確実に物事をこなすことを第一と信条としている自分ではあるが……。
逃げるわけにはいかない。

そう……自分の背後には退けない”理由”が存在していた。

ゆえに……。
ただ愚直に真っ直ぐ突撃。

玉砕。

この結果は必然であり粛々と受け入れるべきなのだろう。

景色がゆっくりと横に流れる。
これはきっと走馬灯みたいなものだ。

俺と彼女との出会い……。

異世界での孤独を癒してくれた大切な少女。

これは俺――黒澤幸助にとって大切な記憶……。

＊＊＊

異世界に召還されてから一週間。
色々あった。
えぇ……本当に色々ありましたとも……。
まさに聞くも涙、語るも涙ってやつですね。

シュワちゃん（仮）と組み手して顔面が変形したり、機械人形（オートマタ）とデッド・オア・アライブしたり、鬼畜幼女のお菓子を買うために十ｋｍ先の店へパシられたり、鬼畜幼女のペットにエサを与えて俺がエサにになりかけたりと酷もんでした。

特に鬼畜幼女の特殊な魔法の練習の標的にされたり、標的にされたり、標的にされたり、標的にされたり、標的にされたり、標的にされたり、標的にされたり、標的にされたり、標的にされたり、標的にされたり、標的にされたり、標的にされたり、標的にされたり、標的にされたり、標的にされたり、標的にされたり、標的にされたり、標的にされました。

一般の魔法体系とは別の魔法体系？　フラグメント？
放っていたら、ハードディスクがあぼーんするあれですか？
デフラグすればいいんじゃね？
そういう問題じゃないと……そうですか。
……問題は俺の命と……笑えねぇ。

まぁ、標的にすれば良いんじゃないでしょうか？

……慣れましたから。

だからと言って、もう少し手加減して……。

魔法を放つのに無詠唱とか反則です。

星の輝きを閉じ込めた何かは知らないがヒャッハーしないでおくれ。

拡散ビーム。
避けるのに苦労しました。
収束ビーム。
極太とかね……。ちびりました。
連射ビーム。
ガドリングガンのごとく打つとかねぇべ。
誘導ビーム。
避けてもいくらでも追いかけてくるとかね。
飽和ビーム。
上の全部ビーム。暗いからって夜闇を塗り替えるぐらい同時に沢山打たんでもね。

うん死ぬかとおもったよ。

あ、ちなみに鬼畜幼女は魔法少女でした。

長い稲穂のような美しい金髪を左右それぞれ括り、髪の房を風に揺らしながらお約束の変身をしています。

実験対象の魔法を扱うために白を基調とした、
きゃるきゃるのフリフリの衣装に身を包んでいました。
明度の高いヒラヒラしたあれです。
容姿も相まって非常に様になっています。
驚きです。
非常によろしいと思います。
ジャパニーズホビーも吃驚。

成長すれば絶世の美女になることを保障されているだろう幼女は、
勝気な海のように澄んだ青い瞳で俺にドヤ顔を向けています。
性格を別にすれば微笑ましいのう。
性格を別にすればなぁ……。

てか、変身バンクもばっちり見えたぜ。
目の保養になります。

とりあえずありがたや～と拝んでおきました。「なんじゃ？」って感じで変な顔をされたけどな。

刹那の間だが色んな意味でフリーダムになるのに気づいてなかったのね。

と思ったら、俺だけ見えたみたい。何で？

……もちろん、この事は幼女様には内緒です。

などと回想しつつ、目の前の出来事から目をそらしている俺。

カッコワル。

俺は頭を抱え、氷河に閉ざされたごとく白い目の前の扉を直視した。

（……どうしよう）

ほんまに如何すればいい……。

人生にかつてない危機が訪れた。

現在進行形でも困っている。

解決手段は不明。

問題解決の糸口も見えない。

それは……トイレ。
それはあるものには天国の門を幻視するだろう。
ただし、
（ペーパーがねえ……）
そう紙がない。
文字通り、紙に見放された俺は、トイレという名の監獄に閉じ込められた事は明白だ
鬼畜幼女の付き添いでパーティに行ったらハブられた俺。
やる事がないからって飯を腹が千切れるぐらい食うとか自重するべきだった……。
まさに後悔先に立たず。
（どーする俺、どーする俺！どすれば良い俺！どうしよう俺！）
頭を掻き毟り、叫びそうになるが強引に飲み込んだ。
微妙にテンパっているが構わない。
（呟けばいいんっすか？　紙を投げ込んでくれるのか？）
否。
ネットが存在しない。
それ以前に、パソコンとか存在しない。
似非中世ヨーロッパには情報端末みたいな科学技術の結晶は存在しない。

そのわりには上下水道整っているし、街灯も整備されている。
白い紙の製造方法も確立されているし、
スイッチ一つで火を起こす様な高度な魔法技術も確立している。
絶対王政だと？　この劣等文明が。ふはははと思っていたら、
ある意味で現代文明に肉薄しているし。

うちのダンジョンの施設のように、魔力により動作するそれらの事を”魔導具”と呼ぶらしい。
一般家庭でも手軽に使える物として様々なものが開発され普及している。

（だからそんな考察、今はいい……）

トイレの中って色々考え付きますよね～。どうでもいい話ですね。
などと思いつつ髪を毟った。
俺は天を仰ぐ。

（万事休すか……）

ふと、そんな事を思う。

だが、紙……否、神も仏もいない状況で起死回生の天啓が閃く。

おもむろに自分の左手を見つめる。

（インド人は左手を使うって聞くよなぁ～……）

気付いたら含み笑いが漏れていた。

どうでもいいじゃないか世間体なんて。
そうとも。いざとなったらターバンを巻いてヨガーすればいいじゃないッ〜。
インド人にクラスアップしたらテレポートできるし、ゴムゴムできるし、火を吹けるし、異世界を生き抜くためにも良い事だらけじゃないかぁ〜。

覚悟を決めよう……。

（……俺はこの程度の試練には負けない）

よくよく考えれば、自分の人生は流されてばっかりだった。
異世界においても自分で決めた事はなにもない……。
客観的に視て、情けないなんてもんじゃないなぁ〜と実感する。
ゆえに……

この決断は尊いものだと確信した。

左手を頭上に掲げ、目を閉じる。

「……俺…俺は…俺はもう逃げない。　退かない！　例え……この決断にどんな困難が待ち受けようとも……」

そこで一息吸い……。

「俺は道を切り開く！！」

くわっと目を開く俺。

脳内物質が駄々漏れで頭がだいぶ逝っている、まさにその時、

（……スター……聞こ……す……）

声が聞こえた。

俺の動作が止まる。

（マスター聞こえますか？　私はあなたを待っていました……私はあなたを助けたい……私は……あなたの為だけに存在します……）

その声は何故か心に響く。

両の目から涙が溢れ……。

嬉しいよな、悲しいような、そして懐かしいような……。

（だから求めてください。私を……）

何故か”そこ”あると確信した。

何故か”それ”を切望した。
俺は……”そこ”に壊れ物を扱うようにゆっくりと手を突き入れる。
刹那、ふわりと優しく両の手で包まれたような感触。
そして、

――世界が光で包まれる――

突然の地面に叩きつけられるような衝撃。
三半規管が揺られ気分が悪くなる。
気が付くとトイレとは明らかに違う広い空間にいた。
足元を見ると魔法陣が描かれているのを確認した。
また召喚か？　と思っていたら、軽快な足音が聞こえた。
道端で通りかかれば誰もが振り返りそうな、プラチナブランドの少女。
メイド姿の少女が感極まった様子で俺に駆け寄る。可愛い子だの

う。

「お待ちしておりました！　……マス……ター？」

だがしかし！　迎える俺は開チン状態！！

メイドさんの言葉が尻すぼみになるのは仕方ないと思う。

重苦しい空気が漂う中、メイドさんが”下半身のみ大自然”に帰っている俺に近づく。

……某野菜人もビックリなオーラが迸っている気がするのだが……。

「ふっ！！」

メイドさんキック！

無言で一撃を受けましたとも。

その際に純白の何かが見えた。

白は正義！

男の浪漫を分かっているねぇ……グッジョブ！

と戯けた事を思いながら、俺は気絶した。

此処はダンジョンの管理をつかさどる管理フロア。

特に、俺がいる部屋はその階の機能を統括する管理室だ。

ダンジョンの全容は百階層で、一口にダンジョンと言っても階層がデフォルトな迷宮、なぜか森、はては海の中と空間がめちゃくちゃに捩れて繋がっている。

ちなみに管理フロアはダンジョンとは独立して存在しており、例

え最下層に到達されても管理フロアに攻め込まれる心配は無い。
最下層にダンジョンの主を配置するとか本末転倒もいいところだ。極度のビビリ症である俺からすると安全が保障されるのは理にかなっている。
最下層にはボス（オレ）の変わりに決戦仕様のゴーレムを配置しているらしい。目からビーム打てます。後、ドリル。ドリルです。全国の紳士諸君の憧れのドリルがイカスね。
ダンジョンを探索している冒険者の皆様には悪いが、変わり身の術ってことでゴーレムと戯れておくれ。起動には物凄く魔力塊を食うのだが目を瞑る。

ダンジョンはルーンダイトの端っこに入り口を構えており、管理フロアは遥か地下に存在している。正確にはそれらは空間が歪んでいて、別の空間に存在しているらしいが俺には理解できなかった。
三次元的に見るとそれらは地下に存在しているが、多次元的に見ると最終的に俺に繋がっているんだと。

通りで、此処のダンジョンが俺の腹にあるような変な気分がするわけだな。

以上が自分は迷宮を管理する精霊だと主張する少女――メイドさんからの説明だ。仕切りなおして彼女と自己紹介をお互いにし、現状を説明してもらっている。
そして、ダンジョンを展開し続けているよく分からない俺の魔法？能力？の説明に入った。

「ダンジョン？」

「はい、ダンジョンです」

「それが俺の魔法？能力？」

「はい、そうです。簡単に説明いたしますと……」

このダンジョンは俺の魔力から生成されたものだと。うん、俺ってば実は魔力いっぱいあったんだって。歴史的に類を見ないほど破格の魔力を有しているらしい。でも、ダンジョンを常時展開しているせいで見た目上も事実上も、魔力がすっからかんだと。

そもそもダンジョンって何さ？

ダンジョン使って何しろと？

ダンジョンいらないからビーム打たせて。この際、口から波動砲でもいいからさ。

クーリングオフしていい？　無理かぁ～。

「まぁ、いいけど。ダンジョンって何できるの？」

「ダンジョン内に任意に罠を仕掛けることができます」

「罠仕掛けるって……どれくらい仕掛けるのに時間が掛かる？」

「そうですねぇ……マスターの場合ですと……仕掛ける罠の種類により変わりますが、一つ仕掛けるのに十分程度時間が必要ですね」

「十分って……それって魔法使ったほうが早くね？」

「それを言っちゃおしまいです」

微妙にがっかりしたが、気持ちを切り替える。
考えようによっては不意打ちとか奇襲には使えるか？
罠ってそういう用途だしな。
まぁ、使い方しだいって事だな。
後でスペックをしっかり検証しておこう。
いざというときに混乱しましたじゃ話にならんし。メイドさんの話は続く。

「他には迷宮内の魔物を指揮する事ができます」
「魔物を軍団として指揮するって……それなんて魔王？」
「魔王ですね。びっくり」

（使えねぇ～……てか、メイドさん投げやり。俺に対しての扱いが微妙に軽すぎる気が……）

会ったときにビーストだったのがいけないのか？
おいらの荒ぶる獣がヤンチャしたせいなのか？
しょうがないやん。トイレから直行とか誰も予想できないぜよ。

まぁ、いいか。うん。
切り替え。切り替え。

魔物を指揮すること事体は問題ない。
問題は、迷宮の外で魔物を運用した場合だろう。
組織的に動く魔物が確認されると勇者様召還って展開になりそう。
てか、このダンジョンにはスライムとグール、オーガしかいないし。
後者は兎も角、前者を指揮して魔王とか言いがかりを付けられても割に合わん。

（平和主義で行くべ……おいらは鳩派。はとぽっぽ）
運用には気をつけないとなぁ。
色々思案しながら、俺は続きを促す。

「能力の詳細の説明を続けて」
「承りました。続けます。マスターは迷宮の構造を変化させることが可能です」

「はぁ……それって、どれ位の時間で弄れるの？」

もしや罠の代わりに実戦で使えるかも？
足場バーストとか切り札になりそうだし。
関節にケンカ売ってるポーズとってＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨ！
うん、全く絵にならないな。
石投ないでぇ～。
メイドさんは申し訳なさそうに口を開いた。

「マスターの場合ですと……三時間ぐらい念じればできるかもしれません」
「ＯＨ、ＮＯ……実戦でつかえないじゃないか……」
「マスターの努力しだいです。慣れれば早くなります」

剣を片手にチャンバラしている時に三時間も念仏唱えていたら胴が真っ二つになるがな。
期待が大きかっただけにがっくりと肩を落とした。

（俺に必要なのは即戦力です）

もっとも、これも罠と同様に使いようによる……と言う事だな。

「最後に迷宮の機能拡張です」
「機能拡張？そういえば、なんか外より暖かい気がするが……もしかして」
「はい、そうです。此処、管理フロアはできるだけ人間が快適と感じる環境に整えておきました……いつかマスターが来てくださる日が来ると信じて……」

あかん。
なんつー健気なメイドさんだ……。
感動したっ！
主人（オレ）のために尽くすメイドさん。
うん、コレは絵になるね。
メイドさんのあまりの忠臣ぶりに興奮したが、あることに気付いた。

「……そういやメイドさんの名前はなんていうの？」
「私ですか？　いえ、名前はありません……よろしければ、マスターに決めて頂ければ幸いです」
「俺？そうだねぇ……」

妙にモジモジするメイドさん。
びゅーてぃほー。これは真剣に考えないとあかんです。
俺は真剣に思案する。
三年前まで飼っていた犬に名前をつけた時の思い出を参考にする。
彼女は俺にとってどんな存在か。

（この世の地獄から俺を導き救ってくれた存在……つまり……）

「……そんじゃ君の名前はナビ子さんで決定！」

「はあ……て、そうじゃないです。嫌ですよ！！何て安直な名前を付けるのですか！？」

彼が犬につけた名前はポチ。

本人は気づいて無いがネームセンスはゼロだ。

「安直とは失礼な。我ながら良い名前をつけたと思う。うむ」

「意味がわかりません！　撤回しなさい！！」

メイドさんは肩を怒らせて抗議する。

何を怒っているのか理解できないが……。

「ふはははは！これはもう正式に決定さっ！！」

「ふざけるな！……このっ！……タヌキさん！！」

ちょっ！？そのワードは俺のトラウマ……。

タレ目だからってタヌキ呼ばんといて。

ドタンバタンと俺と彼女の追いかけっこがはじまった。

なんであれ、コレは俺が始めてタヌキと呼ばれた記念であり相棒である彼女――ナビ子さんとの出会いだった。

「これからもよろしくな」

俺の言葉に目を細め彼女は頷く。

「はい……マスター」

＊＊＊

意識を取り戻す。

胸が優しくなる……そんな気分がした。
懐かしい思い出を夢に見ていたようだ。

脳みそが揺さぶられた影響か意識がハッキリしない。
先ほどの一撃で一瞬、意識を失っていたらしい。
まだ、戦闘は終わっていない。油断せずに気を引き締める。
体の負傷箇所を確認する。
口に入った泥を吐き出し、咳き込んだ。
幸い骨が折れたとか重大な事態は起こっていない。
腕に力を込めて地面に横たわっていた体をよろよろと起こす。
その際に背後を確認する…………恨めしげに。

退けない”理由”が存在した。

境界線の代わりにクマさんがずらり。

クマさん腕組みして士気がものすげえ高いし。

クマさんの言うことにゃ、逃げたら皆殺し♪

今日は近衛騎士団の強化合宿も最終日です。

昨夜は明日の訓練に備えて、ナビ子さんに付き添い指示を出して寝ました。

現在、ナビ子さん達は盗賊狩りの為に模擬演習を行っています。

魔力塊を沢山使うがかまわない。

石橋を叩いて渡る。

日進月歩。

いのちだいじに。

出来ることからコツコツと。

リスク管理は大事です。

そして合宿最終日の朝。

外に出る前に門番のグールのグル夫さんにサムズアップ。

「ぐ」

「グ」

グル夫さんは生前は良い所のイケメンだったらしいです。

アンデットになっても、それらしい感じがするグル夫さんマジイケメン。

ちなみに、暇なときには手合わせをお願いしている。

早急に腕を上げないと、文字通り死ねるから真面目に受けている。

転送陣を起動。

昨日までの俺と同じと思うなよクマ。

クマ狩りの時間じゃ！

などと思っていたら、今までの成果を確認するために前方のタイガーと戦えだと。

うん、しかも沢山。あんなデカイにゃーと戦えと？　無理無理。

背後に逃げたらひき肉になって美味しく頂かれる。

前方はネコじゃらしになる展開と……。

ありえねー。

前も地獄、後ろも地獄。

いたいこともいえないこんな世の中じゃテンテケてんと。

そんな俺を尻目に、同僚は次々と目の前のにゃーをなぎ倒し課題

をこなしていく。
さすがエリート。

それに比べ俺の戦闘力スライム。
俺、終了。

能力使えって？
余計に無理。
後で判明したことだが、外では能力を制限されるらしい。
具体的には、俺が外で能力を使用するには擬似的にその場を支配する領域を展開する必要がある。
その展開した領域内はダンジョンとして扱うことができ、罠とか地形変化とかできる。
ただし……

俺から半径一m。

以前、試しにうにゃうにゃと罠を仕掛けた刹那、俺が引っかかりました。
ははははは。本当に笑うしかなかった……。

ちなみに、ナビ子さんを外に召還した時は狭すぎてお姫様だっこすることができた。
腕がぷるぷる震えたけどな。

「おらぁっ！　何時までぼんやり立ってやがる！」

ヘイ、ボス。そんな急かさないでおくれ。
心に余裕を持とうぜ！
覚悟を決める時間も必要さぁ……ドナドナ。

（はぁ……）

俺は地球で見たそれと変わらぬ青空を見上げる。

――願わくは合宿終了後にも俺の命が残っていますように――

第2話　大自然な俺とナビ子さんとの出会い（後書き）

今回の話しの元ネタは銀魂です。
トイレの回は大爆笑したクチです。
リアルでコーラ吹きました。

閑話休題。

実は今回の話しはもう少し早く投稿できそうでしたが、
冒頭のネタにつなげるために四苦八苦していました。

他にもミスマルカが邪魔したり、仁とか年末の番組見ていたり……
うん、集中力がないですね、私。

誤字脱字の指摘やら、ご意見ご感想待っています。

では次回～。

閑話1　暗闘　～　舞台の裏側　～　<上>

ルーンダイト王国第三王女――マリア・ルーンダイトは此処一ヵ月の出来事について思案していた。彼女はルーンダイト王国第二王女の部屋を訪れている。部屋は第二王女縁（ゆかり）の極東地域のとある島国の住居を模した和室。部屋の主の性格を現してか、必要最低限しか家具や調度品が設置されておらず、まさに質素倹約を体言した部屋の造りとなっていた。ただし、大きな窓から月の光が差込み、質素な部屋の雰囲気を幻想的なものとしていた。

マリアは部屋の主である自分の姉と向かい合い、最近王国の上層部を騒がしているとある厄介な事案について話し合っていた。

「やれやれ……帝国は軍備拡張の兆候有り、神国と公国は国境付近で合同軍事演習……予想通りではあるが警戒しすぎではないかのう・・・・・・」

マリアは幼さの残る愛らしい顔をしかめ頭が痛い思いをしていた。彼女の独白に、淡々と落ち着いた声が続く。

「前代未聞の出来事。イレギュラーな異世界の来訪者を警戒されるのは……しかたがない。それに帝国の反応は予想通り。粛々と対処する」

声の主はマリアの姉である第二王女――ユメ・ルーンダイト。

年の頃は17歳ぐらいだろう。彼女の双眸は血のような淡紅色で廃退的な光を湛えている。病的な程に白すぎる華奢な体は着物で包

んでおり、彼女のあまりにも蠱惑的で危険な美貌を際ださせていた。
ユメはピンと背筋を伸ばし正座しており、雪のようにに純白で絹のように柔らかな彼女の長く美しい髪は畳に広がっており、あたかも一枚の絵画を思わせた。
マリアはそんな姉に妙に淀んだ視線をやり口を開く。

「そうじゃのう。帝国は我ら王国を攻める口実を探しておったから、今回の出来事は
渡りに船じゃったろうな……」

「実際に攻めてくる確率は？」

「7～8割ぐらいじゃろうなぁ……今年は異常気象の影響で、帝国の食料は絶対的に不足しておる。国民の不満を外――つまり、我らに向けなければ帝国は長くないであろうな」

マリアの回答にユメは満足そうに頷いた。

「うん。私も同じ考え。帝国は存亡を懸けて攻めてくるのは間違えない」

「うぬぬ……帝国の動員される人数と物量を考えると頭が痛いのう……」

「それはしかたがない。後で対策を考える。それ以上に問題なのが……」

「公国と神国の動向かのう？　正直、妾は事体を甘く見ておったかもしれん。一ヶ月経っても未だに使者を門前払いされるとは思いもせんかった」

「そうね。特に公国と神国の二ヵ国は帝国と戦争する場合は重要。ルーンダイト単独では
帝国の物量に対抗できない」

公国と神国の二ヵ国は帝国――フォトニア帝国と対抗するために同盟を組んでいる。かつて、帝国は「世界に光を」の号令のもと、圧倒的な物量を背景に領土を広げており、ルーンダイト王国とも五十年前まで交戦状態に陥っていた。帝国の覇を対抗するため三ヵ国は同盟を組み帝国の進行を阻止する事に成功した。現在、再び帝国が動きだそうという状況の下で同盟に亀裂が走ることは王国の存続に関わる事を示している。

「むぅうう。頭が痛い所なのじゃ。此方は何らかの意図を持って召喚したわけではないと何度も説明しているというに……」

マリアはため息をつく。彼女の声には疲労の色が濃く表れていた。異世界の来訪者が表れたという一報は、マリアが想像した以上に周辺国に大激震をもたらしており、彼を召喚した当事者であるルーンダイトは此処一ヵ月の間、周辺諸国に対して釈明に追われていた。その事実をもちろんユメも関知しており、一連の事案の対応を求められた一人となっている。

ユメは国の内政を担う一人として、例え杞憂だとしても諸国の反応を過敏な対応だとは考えていなかった。

「あちらにも守るべき国があり民がいる。此方の言い分を真に受けず、あらゆる出来事を想定し備える事は……為政者として必要な事。それに……」

ユメは目が疲労したのか眉間を軽く揉む。

「異世界の来訪者――勇者は象徴。勇者は権力。そして、演出者（デウス・エクス・マキナ）……如何な劣勢といわれる状況でも逆転し勝利する。それは歴史が証明している。魔王が存在しない世の中で一国が独占して保有することは許されない」

この世界における勇者とは常勝の存在。異世界からの侵略者――魔王を幾度となく打ち払ってきた。魔王は従属を求めない。魔王は領土を求めない。魔王が求めるのは、世界の領域そのもの。魔王が支配した領域は世界から隔離され、一つの例外を除き誰も手を出せなくなる。同じ存在である異世界の来訪者である勇者を除き――

伝承によれば勇者はその能力で世界の歪みを修正し、魔王に支配された領域を解き放った。歪な存在である魔王には勇者自身の力を持って空間ごと捻じ曲げ消滅させた。圧倒的な戦闘力で魔王と渡り合う勇者と呼ばれる存在は、その動向で世界のパワーバランスを容易く崩してしまう。よって、勇者には公平であることが求められた。ゆえに、唯一勇者を召還する手段を得ているルーンダイトは彼等を慎重に扱うことが求めらる。勇者を自らの利益として追い求める事を戒めることで、ルーンダイトは諸国からの信頼を得ていた。

つまり、今回の誤召喚は、諸国に対して今まで築き上げてきた王国の信頼を一気に崩しかねないものだった。

しかしながら、”とある事実”を把握しているマリアからすると周辺国の過剰な反応は滑稽なものとして映っている。

「しかしのう、小姉さま。コウスケは魔法が存在しない平和な世界からの来訪者でのう……勇者と呼べるような戦闘力を持たない一般市民であるのは証明されておるのじゃ。何より勇者の証である勇者

特有の失われし断片（フラグメント）が体内に刻まれて無いのは確認されておるしのう」

失われし断片（フラグメント）とは現在の魔法体系では再現できない、過去の偉大な魔法が個人に宿ったモノの総称である。

そして、コウスケ――本名、黒澤幸助は件の異世界人はイレギュラーな召喚で呼び寄せられたせいか、勇者特有の失われし断片（フラグメント）の発現が確認されていない。

本来はありえない事態である。

勇者を異世界から召喚する際には、人が物質として顕現するかしないかの僅かな隙を付き固有の失われし断片（フラグメント）を刻む機能が召喚の魔法陣に存在する。ちなみに、この魔法陣は遥か過去の文明が刻んだものであり再現不可能である。

この世界で魔法とは神に与えられし偉大なモノとして考えらえられている。かつての魔法使いは神に直接伝えられた”ソレ”を用い万物を創造し法則を自らの物として制御していたと伝えられている。しかし、人の手にあまる”ソレ”は当たり前の如く当時の文明の崩壊の引き金となった。文明の崩壊を目の当たりにした人々は過去の栄華を取り戻すべく”ソレ”を再現しようと試みた。”ソレ”とは幾分劣化した形で、人により確実に適応した魔法として再現する事ができた。だが、歴史は繰り返す物で魔法が原因となり文明の滅びと再生を繰り返すことになる。

結局、現在の魔法体系は風土水火闇光の六属性を間接的に操作す

る事を基本とし、異端な幾つかの魔法体系と合わせて落ち着く事となった。彼ら魔法使い達は劣化していく魔法に嘆きつつも、万能性より安全性、威力より制御を追求し発展を遂げていくことになった。

より人に適応し、才能が無くても万人が扱える物として……。

「それは関係が無い。他国からは失われし断片（フラグメント）が刻まれているかどうかなんて確認できない。なにより、獲らえるべき事象はルーンダイトが魔王の存在しない世の中で”勇者らしき人物”を召喚した事実。最悪な事に、周辺国の同意を取らず、しかも独断で……」

マリアの愚痴にユメは反論した。存在しないモノを証明しろとは、まさに悪魔の証明だとユメは頭を悩ます。彼女は双眸を閉じ人の理性を溶かすような美貌をしかめ、こう着状態を打開する為に様ざまな謀を巡らす。

「それだけ聞きますと、何やら我が国が覇を伺っているように聞こえるのじゃ……」

「くすくす……事実を知っていれば滑稽な反応に見えるのは仕方がない。お父様には領土的野心は存在しないのにね」

「確かに父上はヘタレじゃ。わはははははは」

「ふふふ……でも、だめ。はしたなく大声で笑っては……」

ユメはその華奢で硝子細工の様な指をマリアに対して曲げる。

ぱちん。

デコピン。

良い音がした。

「痛いのじゃぁああ」

涙目のマリア。

そんなマリアの様子にユメの目が細まる。ユメの目にサディスティックな色を帯びているのは気のせいか……。

ユメはマリアに「ごめんね」と言って小動物を愛でる様に彼女の頭を優しく撫でる。

それに反応し陶磁器の様に白く愛らしい頬をぷっくりと膨らませる。

「小姉さま！　子ども扱いは止めてたもれ！」

怒ってますよと、これ見よがしに肩を怒らせマリアは抗議を上げた。

その様子にますます熱い視線をマリアに寄越し、ユメは自らの奇跡の様に整った唇をペロリと軽く舐める。

「くすくす。子供扱いを止めて欲しければ、まずはその口調を直しなさい。背伸びしても大人になれない」

「うぬぬぬぬ……」

不満げに唸り声を上げる妹にユメは微笑み思案する。

（少しいじめすぎた？）

一先ず「こんなところで満足しておこう」と内心考えていた。最後に一回だけと最愛の妹の子犬のように手触りが良さそうな頭に手を伸ばし、

「ふ、触れるでな……うぎゃぁぁぁあああ！！」

絶叫。

マリアはユメの動きに反応し後退したまでは良かった……。

ただし――

彼女が直前まで取っていた姿勢は”正座”。

つまり、これは必然。

（……）

最愛の妹の悶える姿にユメの中で何かが弾ける。それに伴い彼女の鼻息が荒くなり、その双眸が狩人のそれになった。

ユメは正座のまま手だけで前進を開始した。

（……か、狩られる！！）

マリアは痺れて動かない足を庇い、懸命に後退する。

ズリ……ズリ……ズリ。

畳を擦る独特の音が怪しく響く。

ズリ……ズリ、ズリ。

動きに伴いユメの長い白髪が生き物の様に畳を這う。

ズリ、ズリ……ズリ。

暴走した姉の様子をマリアは絶望的な気持ちで見つめる。

（てか、音が怖っ！　目がオカシイのじゃ！）

ズリ、ズリ、ズリ。

（うぉう！　これ以上後退ができないではないか！！）

マリアは壁際に追い詰められ、

ズリ、ズリ、ズ……。

辺りに響いていた音が停止する。

そして、

「ちょっ……小姉……さま……止めてたもれ……」

そんな兎のように怯える妹の哀願に耳を貸す事無く、

「え、あ、あ、あの……」

ユメは目標に手を伸ばし……。

「にょわあああああああああああああああああっ！！」

一瞬の絶叫。

その絶叫を最後に辺りは元の静けさを取り戻した。

閑話1　暗闘　～　舞台の裏側　～　<上>（後書き）

いつもとは雰囲気が違う話です。

後半は日曜までに投稿できればと考えています。

閑話2　暗闘　～　舞台の裏側　～　<下>

ルーンダイト王国第二王女――ユメ・ルーンダイト。
彼女はその色素の薄い外見――所謂アルビノであり、その神秘的な容貌は国中に知れ渡っている。
為政者としては、容赦なく冷酷な手段を用いることで知られている。
近づくものを氷に閉ざすが如く繰り手は絶妙の一言。
彼女は国の中枢として万全に機能していた。

ユメは幼い頃から、次代の王を担うであろう姉を支える傑物として育てられてきた。
育成方針は唯一つ。

ルーンダイトの守護。

そのため、彼女は暗部を含め手段を選ばない豪腕を王弟から叩き込まれた。

ユメは政敵をあらゆる手法で失脚させ、返す刀で賊人の家族の首をはねる様な容赦ない思考を植えつけられている。

全ては王国の繁栄の為に……。

そんなユメに対して姉妹はと言うと、

姉は父から寛容たれと王道を叩き込まれ、妹は叔母から王家の名誉を守るために正道を身に付けた。

特に妹とユメとでは育成方針が間逆ではあるが、不思議なほど仲がよかった。
そんな微笑ましい姉妹達だが、
現在、その縁に危機が迎えていた。
「えぐ……えぐ……えぐ……ぐす」
目の前で泣く哀れな子兎。
ユメは呆然とその様子を見つめていた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

（やりすぎた）

その一言がユメの内心の大半を占めていた。
子狐の様に妹が悶えている愛くるしい姿を見たら、もう。

（ツンツンしたくなっても誰も攻められないと思う）

だが、彼女は引き際を間違えた。
家族の寵愛を一心に受けて純真に育った少女。
目に入れても痛くないほど可愛い妹――マリアが泣いている。
「うぐ……ひん……」
その泣いている姿にユメは興奮を覚え……否、心が張り裂けそう

な程痛めていた。
泣いている妹に、手をゆっくりと伸ばしかけたがユメはかぶりを振る。
そして、普段の彼女の姿が知っているものが驚くくらい優しい声を奏で、
「……ごめんね……お姉ちゃん……反省している」
「ひっく……小姉さまなんて嫌いじゃぁ……」
がっくりと彼女はうな垂れた。
そりゃもう深く深く、それは深く地面に全身が埋まれという如く勢いで崩れ落ちた。
彼女のその姿を見ると「がーん」と言う擬音が聞こえてくるぐらい落ち込んでいるのが拝見できる。
まぁ、自業自得なのだが。
ユメは普段纏っている人を誘惑するような妖しい雰囲気が完全に吹き飛んでいた。
しかしながら、見る者が見ると彼女の微妙にほつれた着物姿がなんとも艶かしいのだが……
有体に言えば彼女は狼狽していた。
最愛の妹からのハラワタを抉るごとき一撃。
それはボディブローから顔面にアッパーがクリーンヒットした勢いで彼女の心が抉られた。
ゆえに彼女は満身創痍。
かつて、政治の場でも彼女を此処まで追い詰めることが出来た猛

者は果たしていただろうか？

ユメの眼は次第に虚ろにになる……その様子は陸に打ち揚げられた魚を連想させた。

――だがしかし。

彼女は自慢のミルクの様に白く輝く長い髪を振りまき、顔を”ガバリ”と勢いよく上げた。

その紅い目には強い決意の光が灯る。

（落ち込んでも状況は改善できない）

今この場で沈黙は悪なり。

湖に石を投げれば波紋が起こる。

そう――現時点で必要なのは湖に波紋を起こすような現状を変えるような行動だ。

例え、小石を投じるだけでも苦境を変えうる事は可能なのだ。

言葉（武器）を手に立ち上がろう。

立ちふさがる難題（敵）は悉くなぎ払え。

生涯で学んで来た知識はすでに己の血肉となっている。

今ここで十全に発揮できないようなモノなら捨ててしまえ。

さぁ、行こう。

戦場へと――

力の使い所を何やら間違ってる気もするが、ツッコミ役は小動物に成り果てている。

つまり、頭のネジが外れ宇宙の彼方に思考が飛んだ様子の彼女を戒める者は不在だ。

残念な事に……。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

（どうすれば？）

まず始めに、彼女は現状の把握に努める。

敵のウィークポイントは？

決定打は？

その刹那、千に及ぶ思考を展開。

それらを起点に百に及ぶ策謀を生み出す。

実現可能な十に及ぶ手まで絞込み、

最良たる決定打を導く――

常人では理解しがたいほど高速で展開される思考。
彼女の鬼才に驕らず十七年に及ぶ研鑽を続けた賜物だ。
――全ては愛しい我が妹のために――
彼女の頭脳はかつて無いほど澄み渡っていた。
激しく才能の無駄遣いではあるが……。

（マリアの大好きなもの？）

古典的な手ではあるが、好きなモノで相手の気を静めるのは非常に有効だ。
先人達が積み上げてきた知識を侮る無かれ。

（王道に勝るもの無し）

ユメは一つ頷き、自分の部屋の隅に設置している戸棚に冷徹な視線をやる。

（水羊羹が置いてあるはず……）

つい先日、極東の小さな島国の母の親戚から贈り物が届いた。

ルーンダイト王国では見かける事が珍しいそれは、日々の疲れを癒すための虎の子の一つである。
まだ一口も手をつけて居ない虎の子は、ユメは家族に内緒でこっそり食べようと思っていた一品だ。

だが、

「ひっく、ひっく……ぐす」

未だ目を兎の様に赤くして泣いているマリアを目の前にして……

（出し渋る事なんてできない。全力（甘いもの）を尽くさないと）

そう決意して、彼女は立ち上がる。

「少し待ってて……お茶を入れる」

ユメは後ろ髪を引かれるも、迷いを断ち切り妹に背中を見せて移動。
先ほどとはうって変わって悲壮感を微塵も感じさせない彼女は、凛とした雰囲気を漂わせ部屋にある目標へ迷わずに進む。

そう……台所（戦場）へと。

こぽこぽこぽ。

湯飲みにお茶を淹れる。
辺りに緑茶独特の匂いが漂い、妹の許へと急ぎはやる心を落ち着けてくれた。

（急いては事を仕損じる）

お盆に湯飲みを二つ乗せ、真珠の如く磨きぬかれた白い小皿に件の水羊羹を切り分ける。
母の故郷では食事は五感全てを楽しませるモノだと聞く。
ゆえに、視覚を最大限楽しめるように熟慮。
切り分けた水羊羹を細心の注意を払い小皿に盛り付ける。

白と黒のコントラスト。

お盆に載せたそれらを崩さないように注意し、最愛の妹の許へ移動する。
重心のぶれない堂々とした歩みは正に優雅。
これも日々の努力の結果だ。

ユメは妹の前で歩みを止め、音を絶てず静かに座る。
マリアはユメが視界に入った瞬間に顔を背けた。
マリアは部屋の隅で畳の上に体育座りしていた。
その様は今にも消えてしまいそうであり、ユメは内心激しい動揺をした。

（泣きやんではいるけど、まだ怒っている）

マリアの態度にユメはショックを受けたが、何とか表情に動揺が

現れないように注意した。

（戦闘開始）

心の中だけで開戦の狼煙を上げる。

「マリア……お茶を入れてきた」

つーん。

反応無し。

「甘いものがある」

ピクッ。

目標（ターゲット）に微かだが反応は有る……。

ユメはマリアの反応に満足げに頷く。

（やはりマリアは甘い物が好き。畳み掛ける）

彼女は油断が即死に繋がる事を学んでいた。

ゆえに、油断も慢心もせず己を戒める。

「私のお母様の親戚が送って来た。一緒に食べよ」

ピクピク。

マリアのお人形の様な小さな体が身じろぎした。

「緑茶にとても合う。美味しい」

頑なに背けていた顔をゆっくりと此方に向ける。

泣き腫らした跡が目元に未だに残っており、その様子は従来の奔放的な雰囲気が鳴りを潜めていた。

マリアは微かに興味を持ったのか、小皿を覗く。

あたかも餌付けされている子犬のようにも見える。

ユメの保護欲をかき立てる仕草で、彼女は今にも飛び掛りそうな体を全力で押さえつける。

そんな姉の様子にマリアは気付かず、消え入りそうな声でぽつりと一言。

「……美味しい？」

ユメは満面の笑みで応える。

「うん。ほっぺたが落ちるくらい美味しい」

未だ警戒心を解かないマリアだが、緑茶の匂いと目の前の水羊羹に強い関心を抱いた。

くぅ～。

と可愛らしい音が部屋に響く。

嗅覚と視覚を同時に攻められては彼女の強い警戒心も白旗を揚げるしかない。

にやり。

（……勝った）

ユメはマリアの怯えたように子狐の様にぷるぷるとそれに手を伸ばす様子を観察した。

（あんなに震えちゃって……とても可愛い）

妹の様子に目を細め、やはり胃袋を攻めて正解だとユメは確信する。

（頑張れ。後少し……）

そして――

マリアの手に水羊羹が届く、

その刹那。

ガバッ。

「あっ」

マリアの愕然とした声。

そう……妹のぷるぷるした姿に我慢できずユメは、

（しまった）

つい、お盆をマリアの手が届かない位置に持ち上げてしまったのだ。

手にお盆の重さを感じつつ、内心冷や汗がだらだらで体が硬直する。

「バカァ！　何で意地悪するのじゃ！　小姉さまの大うつけものっ！！」

マリアのかん高い声で罵詈雑言が飛び交う。

しばらくの間、ユメは妹に対してひたすら低姿勢で謝り続けることになる。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

その後、マリアに対してユメは奥の手を使い、”中にお餅の入った甘いモナカ”を提供する事で手打ちとなった。

ユメお抱えの職人の手による一品はマリアの舌を存分に満足させた。

「むぅ……小姉さま反省しておるのか？」

「うん。もう、意地悪しない。食べよう」

マリアがユメを疑念に満ちた視線で睨む。
「疑わしいのじゃ……」
「くすくす」
そんなマリアの様子にユメは笑顔で受け流す。
「やれやれ」と言う声が聞こえそうな態度をマリアは取った。
「しかたないのう……さっさと厄介事を片付けるのじゃ」
「うん。そうしよう」
マリアの提案に、ユメは軽く頷き目を瞑った。
ユメは思考を切り替える。
マリアの姉からルーンダイト王国を支える屋台骨へと……。
再び開いた時、その紅い双眸に心を覗かれるような妖しい雰囲気が宿る。
（優先すべき事象は？）
一瞬の思考で結論を出しユメはマリアに問う。
「異世界人、クロサワコウスケ様の身辺は？」
「うむ。近衛騎士の強化合宿に参加しておるので何事も無いのじゃ。近衛騎士は妾達、王族に直接忠誠を誓っておるからのう……不満分子の介在する余地は無いので安心じゃ」
手違いで召喚された男――黒澤幸助は王家から直接身分の保証が行われている。

また快適に生活できるように配慮され、衣食住が提供されていた。
そんな手厚い保護を受けている彼だが、三週間前にとある一報がユメの元に届けられる。

ユメはマリアから例の異世界人が”頻繁に暴行を受けているらしい”という報告を受けた。

ユメはその件に調査を指示し、実際に複数の派閥に彼は狙われている事を確信した。
どうやら第三王女であるマリアの名の元に、従者として手厚い保護を受けている無能者（コウスケ）をやっかみ、彼を排除すべく動いた者達による犯行であることが判明した。

そこで対抗策として、ユメは事態が収束するまで彼を王都から連れ出す事を決定する。
名目上、マリアが”彼の体力不足”を理由に、近衛騎士の強化合宿に参加させる事で、謀反人の手に届かない場所へと遠ざける事に成功した。

「それなら安心。それで愚か者の特定はできた？」
「それがのう……大方は特定したのじゃがのぅ。未だに尻尾を出さない奴がまだおる……とは言え、特定した奴の大体は懐柔できたのじゃ」

おかげさまで、マリアの懐は非常に寂しいモノとなった。
また、父や姉にも沢山のカリを作ることになり、後のことを想像すると怖いのだが目を背ける。

そんなげんなりとした妹の表情を見て、ユメは顔を曇らせ助け舟を出す。

「私の手が必要？　邪魔する古狸ごときなら失脚させてもいいよ？　排除してもいい」

最愛の妹であるユメの手助けが出来るかもしれない。

ゆえに、ユメは興奮し怒涛のシスコンモードに突入しかけたが、

「だ、大丈夫なのじゃ！　妾に任せてたもれ！」

マリアからの全力否定にユメは勢いよく肩を落とす。

マリアの声にはどこか焦りの色が含まれていた。

妹のつれない返答に、ユメが微かに舌打ちをしたのは気のせいか……。

だが、王家をあらゆる手で守護すべく育てられてきたユメの言葉は重い。

マリアが慎重になるのはしかたない。

（魑魅魍魎共とはいえ国を支えている勇士じゃ。文字通り浄化されるのは不味いしのう……）

結論から言えば、容赦を知らない彼女の姉が動けば文字通り血の雨が降る。

その様は人里に放たれたドラゴンの如し……。

下手人を見つけようものなら良くて失脚。最悪で一族郎党ゴートゥーヘブン。

まさに、残るのは残酷悲劇だけだ。

先ほどのダメージから立ち直ったユメはマリアに指示をする。

よく見ると童女のように唇を尖らせて不満げではあるが……

「……そう。引き続き、貴女には彼の身辺を全面的に任せる。今日で合宿は終了。彼が王都に戻る前に決着をつける」

「うむ。任せて欲しいのじゃ。それにコウスケを手違いで、異世界に召喚してしまったのは妾だしのう……責任を持ってコウスケが安心して暮らせるよう、環境を整えねばならん」

（それにのう……コウスケが元の世界に戻れるようにせねばならん。よしんば姉さま達や父上が邪魔をしても、妾の独断で返してやらんと）

「くすくす……マリアは責任感がつよいのね。とても良い子」

マリアはユメのからかいに不満げに声を漏らす。

「むぅ……じゃから子供扱いしないで欲しいのじゃ、小姉さま……」

「私はマリアを子ども扱いしてない。特にあなたが彼を真っ先に保護したのは良い判断だと評価している」

「まぁ、おもいっきり暴れておったからのう。あのままじゃと首が飛んでおった、それに保護が遅れると……」

例え非がルーンダイト側に合っても、王族に手をかけようとした幸助の行動は非常に不味かった。

周りを諌める為にマリアが昼夜問わず駆けずり回らなければ、幸助の死刑は免れなかった。

マリアのどこか懐かしそうな声をユメが引き継ぐ。

「うん。初動が遅れていれば彼は姉様の預かりになっていた。暴れたからと言って牢屋に放り込まずに、マリアの従者にして身分を保障したのは良い判断」

「大姉さまの所属になると戦場に放り込まれて、意味もなく命をおとすだけじゃしなぁ」

「だからマリアの従者にした判断は正しい。なにより大事なのが彼には命を大事にしてもらわなければいけない……」

そこで一旦言葉を切る。ユメの視線に強い意思が見て取れる。

「そう、我々の意思だけでは勇者を召喚するための魔法陣は”起動でき無い”」

勇者召喚の魔法陣。

王国の上層部の一部しか知られていないが、それは特定の条件下でしか起動できないことが確認されている。

つまり条件を満たせていないにも関わらず、マリアの引き起こした誤召喚は本来ありえないモノであった。

そもそも、マリアの注ぎ込んだ魔力は召喚するために”必要な魔力量の十分の一”にも満たないものだ。

従来通りなら天地がひっくり返っても魔法陣が起動できるわけがない。

そこに意味を見出そうとする姉の考えは分からないでもない。しかし、

「不可能なことが出来た。そこに何らかの意味があると小姉さまの考えもしかたないのじゃが……どうかのう……」

誤召喚に意味を見出し自分を慰めようとする姉に申し訳ない気持ちと、自分の不手際を思い出しマリアは渋面を作りため息をつく。

落ち込んだ妹の様子にユメは慌てる。

マリアのアンニュイとした姿は彼女の姉心を震災クラスで揺さぶる。

「そんなに落ち込まないで……お茶を飲もう」

「そうかえ？　う～む気を付けんと」

「お茶がうまいのぅ」とマッタリした姿にユメは満足げに頷く。

親愛なる妹には、どうやら召喚に関する話題はタブーのようだ。

何て迂闊。

ありえない失態。

ユメは一口お茶を飲み溢れだそうとする感情を押さえつける。

一先ずは、マリアがお茶を飲み終えるまでに話題を変える事が先決だ。

（この場でおかしくない話題）

女性が喜ぶ話題……色恋沙汰が一般的か？

ユメは軽く想像する。

マリア。好きな子出来た？

（うん。いたらヤル）

おっと。

思考が斜め上に飛んだようだ。

この話題では自分の気分が悪くなりそうだ。避けるのが無難。

（無粋ではあるけど……）

ユメは口内に広がる渋みを払拭するために一口甘味を食した。

「マリア。時間が遅い。帝国の対抗策を考えて、今日は解散しよう」

「帝国？　神国と公国はどうするのじゃ？　優先順位としてはコチラが高いじゃろうに」

うまく話しの流れの誘導に成功し、ユメは内心ほくそ笑んだ。

「それは心配ない公国と神国には別の手を考えている。私に任せて」

そう自信に満ち溢れた声を出し、表情を変えずにユメは小さくブイサインをした。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

あまりに自信満々に言う姉にマリアは少し首を傾げたが杞憂であると結論。

姉ができると言ったら、手段を問わずに解決に導くのだろう。

「小姉さまが大丈夫というなら任せるかのう……帝国への対抗策……」

「そうじゃのぅ」とマリアは唸り。

「国境付近の商人の取り締まりを厳密にして、帝国の出方を見るのはどうじゃろう？」

帝国は広大な領土を持っているが、人口に比べて食料自給率が追いついていない。そのため食料を周辺国から輸入することで帝国は足りない食料を賄っている。特に王国とは五十年前に小麦を決まった量を原価に限りなく近い価格で帝国側に輸出することを条件で停戦を行った経緯がある。

それが原因で、帝国側の小麦の生産が一気に低下したのは何とも皮肉な話である。

合法非合法問わず、現在の帝国では主食である小麦の仕入れを王国に大きく頼っているのが現状である。王国側で非合法に輸出されている小麦などの食料の輸入が滞れば、帝国の現状は非常に厳しいものとなる。ゆえに……。

「なるほど……効果的かもしれない。一ヶ月を目処にそれを続けるするのは有益。食料が供給されずに帝国が慌てて矛を収めれば良し。そうでなければ……」

良案を思いついたのか、姉がコクリと頷く。

「帝国が攻めてくる事を前提で、魔物のエサを森にばら撒きましょう」

「エサを森にばら撒くと？……魔物を繁殖させる気なのじゃなぁ」

「帝国が攻めて来た時に優れた防波堤になる」

魔物はごく少量の魔力を帯びており決定打を与え難い。

魔力には魔力。

これがこの世界の一般法則。

魔法か魔力を帯びた獲物で討伐する必要がある。

ある意味両陣営に取って、はた迷惑な防壁をたいした費用をかけずに一瞬で構築する事と同義である。

また、国境付近に軍隊を増員する口実にもなる。

「帝国と取引している商人達はどうするのじゃ？　それに、森の周辺の住民は？」

「本来、民間人は帝国との商売は禁止。今までは停戦したこともあり、王国の利益になるならと半ば黙認していただけ。利益を貪るだけの頭が悪い商人(ハイエナ)を一掃する良い切欠になる。周辺の村々には兵力を増強して配置しておく。被害が出るかもしれないけど、大局的に見れば微々たるものですむ」

「うむむ……確かに小姉さまの言う事は一理あるのじゃ。自分の利益しか考えられない視野が狭い商人は戦時中でも、どうせ王国の重要な資源を密輸するに決まっておるし……心苦しいがしかたないかのう」

「うん。それに、頭の良い子達は異変に気付きすぐ手を引く。頭の悪いヤンチャさんを間引くにはちょうど良い機会」

(うぉう……小姉さまが微妙に黒いのじゃ……)

内心ユメの過激な思想に恐れ戦き、マリアは若干退く。

教育方針の違いは思想に隔絶しがたい何かを生むものだと実感する。

そんなマリアの様子にユメは「どうしたの？マリア」と可愛らしく小首を傾げた。

マリアは慌ててぶるぶると首を振る。

「……何でも無いのじゃ」

「変なマリア……それはそうと、森に撒くエサは牢獄に居る死刑囚をバラバラにして使おうと思っているけど、あなたは如何思う？」

(バラバラ……？　つまり挽肉？)

「イヤイヤイヤ、それは不味です。何より惨殺死体を長期間ばら撒

くと王国の名誉に傷が付くのじゃ」

姉の案は外聞を気にしなければ、非常に優れていることだけは認めてはいた。

魔物は特に人の肉に対して異常な食欲をかきたてる事は長年の研究で判明している。

しかし、マリアは王家の名誉を守る立場としてソレを到底容認できるものではなかった。

なにより、死刑囚とはいえ遺体は家族の元に返すべきだとマリアは考えていた。

「そう？　良い手だと思ったのだけど」

童女のようなしぐさでアゴに指を当てて唸る姉。

マリアに意見する兆候は見受けられない。

ユメが自身の意見を素直に取り下げた事にマリアは安堵した。

「う～ん。ここまでね。私は宰相以下大臣に根回ししておく。あなたはクロサワコウスケ様の身辺の対策をお願い」

どうやら解散のようだ。

姉に会釈をして立ち去ろうとする。

くい。

微かだが衣服に違和感を感じる。

「マリア。用事も終わったし、お姉ちゃんと一緒に本読もう」
振り返るとユメが彼女の衣服を羽毛のように柔らかに掴んでいた。
「ほら、これは最近発行された戦略の本。最新の魔導技術をまとめた論文もある」
あまりに不器用な姉の行動。
ユメの満面の笑みに言葉を失う。
(てか、それらは家族と読む本じゃないじゃろうって……まぁ、しかたないかのう……)
あんな嬉しそうな姉を無碍にはできない。
マリアは抵抗を諦めた。
「小姉さま。甘味は残っておるかのう？」
「うんうん。いっぱいあるよ。お茶も持って来るね」
ユメは勢いよく何度も頷き、お茶を汲みに柄にもなく慌てて行動する。
そんな姉の態度にマリアは微笑ましく思いつつも苦笑した。
朝日が昇る前には解放されるだろうかと考えつつ、結局マリアは姉の部屋で一晩を過ごす事になった。

閑話2　暗闘　～　舞台の裏側　～　<下>（後書き）

遅れましたが何とか投稿できました。
とりあえず今回の話で序章は終わりという位置づけです。

ようやくタヌキ君に、迷宮使いらしい行動を取らせることができそうです。

ほんま長かった……。

次回からは、しばらくの間【迷宮死闘編（偽）】に入ります。

なんか斬ったり撃ったり落としたりスライムするそうです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6621p/

職業は迷宮使い

2011年1月12日00時33分発行